

# 「特集：地球表層プロセスにおける土壌物理学の役割」

土壌物理学学会幹事 森 也寸志<sup>1</sup>

土壌物理学学会では、2009年度土壌物理学学会大会講演会において第51回シンポジウム「地球表層プロセスにおける土壌物理学の役割」を2009年10月24日に明治大学生田中央校舎メディアホールにて開催した。

我々の足下にある土壌は、植物の培地であり、水を蓄え、負荷物質を濾過し、我々人間に安定した生活を与えてくれている。地球陸域の最表層を構成する土壌は、水や大気に並ぶ環境資源の一つで、地球規模で種々の課題が議論される昨今、土壌を通じた水・物質循環、大気とのガス交換、すなわち物理的なプロセスは地球科学にとっても大切な情報を持っている。本年は、土壌物理学学会が日本地球惑星科学連合に加盟した年であり、これまでの活動に軸足をおきながらも、地球表層プロセスにおける土壌物理学の役割を認識し、また我々が進むべき道について考える好機とも言える。そこで複数の異なる分野の研究者からご自身の専門に関わる研究についてご講演いただき、互いの情報交換や議論を通じて、地球陸域の表層プロセスにおける土壌物理学の役割について会員の認識を深めたいと考え、シンポジウムを計画した。

本シンポジウムでは、陸域の表層プロセスに関わる研究をされている4人の研究者からご講演頂いた。まず

大学や研究所からは、大手信人氏から森林生態系の物質循環にあたる水文過程の影響について、麓多門氏から農地からの温室効果ガス発生量の推定についてご講演頂いた。また、山本肇氏からは二酸化炭素地下貯留の数値シミュレーションの現状と課題として、実務的な観点からご講演頂き、最後に国外の動向として、登尾浩助氏からアメリカ土壌科学会における近年の研究動向についてご講演頂いた。これらの貴重なご講演の内容を広く学会員に情報提供するため、学会事務局では講演内容をベースとした原稿を講演者に依頼し、ここに特集記事として掲載するものである。

また、大会では例年通りポスターセッション「土壌物理研究の最前線」がもうけられ、土粒子レベルのマイクロプロセスから流域レベルの水平の物質循環にいたる広い分野から合計42件の発表があり活発な議論が行われた。大会における情報交換や本特集における情報の共有が新たな研究の種となり、さらなる議論に発展すれば幸いである。

<sup>1</sup>Faculty of Life and Environmental Science, Shimane University, 1060 Nishikawatsu-cho, Matsue-shi, Shimane 690-8504, Japan.